

---

# The war with control

曇り空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The war with control

### 【Nコード】

N5041A

### 【作者名】

曇り空

### 【あらすじ】

急激な発展を見せた未来の世界、日本はサイボーグ法によって人間をベースとし、各部を強化された『サイボーグ』を作り出した、しかし、世界からの強い反発を受け、この法律は廃止される、そしてサイボーグの処分が決定。破壊命令が下される。しかし、サイボーグ達は直前で脱出。立ち上がり戦う者、人間社会に息を潜め逃亡を続ける者、それぞれの道を歩みだしたサイボーグが真実に直面した時、彼らは世界の水面下のやり取りを目の当たりにする。その時、彼らのとった行動とは・・・？

## プロローグ

2032年 世界の科学は急速に発展、その中でも大きな成長を見せたのが日本だ。

元々、科学力では他の国に勝っていたこの国は、他国と決定的な差を生み出すため、2030年『サイボーグ法』を採択、これは人間をベースにし、その本体に主に3つの改造（攻撃的改造、防御的改造、頭脳の改造）を、施し、体の一部に機械の部分を持つ人間、つまり『サイボーグ』を生み出すことを国が許可、奨励するという法律だ。

しかし、人は圧倒的なものを恐れ、そして許さず、排除しようとするものである。国連はすぐさま日本に対して法律を見直すように迫った、そして1ヶ月後日本もこれを承諾、『サイボーグ法』を廃止した。その際問題になったのが、すでに作られたサイボーグの処分をどうするかだ。

アメリカはサイボーグにも人権はあるとし、日本にサイボーグを解放、そしてサイボーグのその後の支援をさせることを主張した。

しかし、それに強く反対したのが中国だ。サイボーグはすでに人間ではない、したがってサイボーグに人権はない、というのが中国の主張だった。

中国はアメリカを説得した。確かに、サイボーグの力は底知れず、現在、世界一の権力を持つアメリカにとっては、サイボーグは権力を日本に奪われかねない、危険な存在だった。

しかし、アメリカにも立場がある、現にサイボーグ保護活動団体などができていて、サイボーグを処分すれば国内からの反発も抑えられないかもしれない。

そんな時、なんと日本がサイボーグの処分を主張したのだ。理由は『サイボーグ法』によって、世界から孤立した本国の信用を誠意を見

せ回復するため』だった。アメリカも渋々同意し、サイボーグの処  
分が決定した。

## 第二話 繰り返し

「キンコンカンコン」

授業終了のベルが鳴った、今日の授業はこれで全て終了だ。

教室から出ていく教師を見ながら、彼はノートを閉じた。

そして、ため息をついた。誰かが肩を叩いているのに気付いたからだ。

体育館裏と言うカツアゲには定番のスポットで恒例のユータイジメが行われていた。

「あのなあ、お前もやだろ？殴られんの、だったら金持ってくりゃいいのよ、分かる？」

這いつくばった彼を蹴りつけながら、不良グループの一人が言った。

彼は何も答えない、ただ攻撃に耐える。いつものことだ。20分もすれば、不良達は飽きて帰っていく。

20分間の辛抱だ。大した事はない。

今日もだった。約20分で彼らは帰っていった。

「明日は持つて来いよ！」

帰り際に背を向ながら言うてはいたが、多分彼らだって期待してはいない、彼らにとってはこうやって自分を毎日殴ることで十分な利益なのだ。

彼らが立ち去ったのを見て、ユータは立ち上がった。

『ユータ』この名前こそ、彼が不良達の標的になった原因だった。

どうやら、彼らにはカタカナの名前が気に入らないらしい。

自分達と違う者は排除する、これが世界の考え方だと、ユータは知っていた。

パツパツと泥だらけになった制服を払い、くしゃくしゃになった髪を整えようとした、しかし、制服も髪も、手のつけようがないこと

を悟ると彼は歩き出した。

そしてまた1日、また1日と日は流れていく。毎日の繰り返し  
彼は少し後悔していた。

あの時、なぜ『逃亡』の道を選んでしまったのか。所詮、『人間に  
なる』など不可能だったのだ。

戦う道を選らんだ彼らと共にすすんでいたら・・・？

彼は考えていた。昼休みの教室、彼の席は窓際なので、日差しが  
きつかった。黒板には文字がズラツと並んでいる、立たされた生  
徒が問題に悩む、ユータの強化された頭脳にとっては見た瞬間に分  
かるような問題でも、一般中学生には難問らしい。

その時だった。

『ダダダダダ』

その音と共にガラスが割れ、生徒が何人か血を流して、倒れた。

「なんなんだよっ」

不良グループの一人が叫びながら、机の下に潜った。

（分からないのか・・・？）ユータは思った。

（僕達は今、何者かに攻撃を受け、危機的状況にさらされている。

敵の外見は50代、小太り、手にはマシンガン・・・）

「おい聞け！小僧ども！あつ小娘もいるか？ガッハッハ！」

手にマシンガンを持ったオヤジが叫びだした。

### 第三話 死・微笑み（前書き）

取りあえず今日はここまでかな。

一部、二部では段落替えが見にくくてすみません。

初投稿でドキドキしておりますが、是非是非、ご感想を！

### 第三話 死・微笑み

「いいか！世界は狂ってる！なんでって？まあ考えてみるよ！俺みたいな一般人がこんなマシンガン持つちゃってんだぜ！？それで俺みたいな狂ったやつの出番だ！俺はお前らが嫌いだ！偉そうにしゃがって！てめえらゴミクズにビクビクする日々は終わりだ！俺がお前らをぶつつぶす！」

オヤジは唾を撒き散らし、顔を火照らせ、大げさに両手を動かしながら叫んだ。

オヤジは教室の中に入ってきた。ドアの近くの女子が悲鳴を上げた。

その時、ユータがオヤジに向かって言った。

「あんたは僕達が嫌いだから、殺すの？」

ユータが立ち上がったのがよほど意外だったようで、不良グルー

プの一人が

「エッ？」

と声を漏らした。

オヤジの答えを待たずにユータは一步ずつオヤジに向かって歩き出した。

「ん？そうだあ！俺はお前達が嫌いだあ！金髪で歩き回るのがかっこいいと思い込んでる連中がな！このクラスにもいっぱいいるなあ！」

オヤジがクラスを見回した。真ん中あたりの席の金髪の男子が必死で頭を隠そうとした。

「でも、僕は金髪じゃないよ」

そう言いながらユータはオヤジの方に歩き続ける。オヤジに微笑みかけながら

「そうだなあ！でも俺はなあお前みたいに偉そうなやつも嫌いなんだよあ！」



そう叫びながらオヤジはマシンガンの引き金を引いた。

一秒間に何発もの銃弾がユータの体に打ち込まれる。

「死」

その場にいた誰もの頭にユータの死のイメージが浮かんた。

銃声が鳴り止み、そこにはユータの死体が横たわっているはずだった。

しかし、彼は立ったままだった。

それどころか、彼の体からは血すら出ていない。

「ヒイイイ！」

オヤジが後ずさりした。

ユータはまた歩き始め、オヤジとの距離が3メートルほどになったところで止まった。

「あのさあ、僕もあんた嫌いだから、殺してもいいかな？」

ユータは微笑んままだった。

その時、パトカーのサイレンが聞こえた。

## 第4話 始動（前書き）

一応、この話にでくる『大森』も主要キャラクターになる予定です。

鉄也さんご感想ありがとうございます！これからもがんばるので宜しくお願いします！

## 第4話 始動

大森は戸惑っていた。

あの時、『マシンガンを持った男が暴れている』との通報を受け、彼を隊長とした。『特殊装甲隊』が派遣された。

しかし、実質彼らは必要だった。マシンガンを持った男は既に戦意喪失しており、全く抵抗せずに逮捕することが出来た。

問題はその男ではなかった。

彼をここまで恐怖させた少年。

彼には明らかに銃弾の後（服に1センチ大の穴が無数に開いていた）があつたのだが、彼は血すら流していなかった。その場にいた隊員全員が悟った。

（彼はサイボーグだ）

そして今、彼は取り調べを受けている。

大森も『警備』という名目で取調室の中にいる。

「答える！他のサイボーグの居場所を知っているのか！？知らないのか！？」

取調室の刑事、管見が叫ぶ。

「……」

ユータは黙秘を続けている。

「最後だ・・・他のサイボーグの居場所を知っているか？」

管見が囁くように言った。

「……」

ユータは何も答えない。

管見が長いため息をついた。

「サイボーグには人権がないのは知ってるな？」

管見がユータの目を見つめた。

コクリとユータが頷いた。

「つまり、俺が今ここで、利用価値のないサイボーグを殺しても罪にはならないということだ」

管見は内ポケットに手をつ込み、そして拳銃を取り出した。

バスッ

管見の体から血が吹き飛んだ。

大森はユータを見た。

（違う、こいつじゃない）ユータは膝の上に手を置き。銃を打てたようには、とても思えない。

（アー、アー聞こえてる？ 今あんたにだけ聞こえるように喋りかけてる）

頭の中に声を送られてくる感じだ。

「どこだ！」

大森が叫んだ。

（ちょっと遠く、でも、うちの優秀なスナイパーはここからでもあんたの頭を打ち抜くぜ）

「チッ」

大森は舌打ちした。相手の目的が何であれ、非常に不利な状況だ。

（我々はそのサイボーグを保護しにきた）『声』が続けた。

（我々の名はPeace crushers）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5041a/>

---

The war with control

2010年10月28日08時05分発行